

岩野泡鳴「日の出前」について

——田山花袋・国木田独歩との関係をめぐって——

王憶雲

一、はじめに

岩野泡鳴の最初の小説集『耽溺』（明四三・五、易風社）は、出世作と称された同名の短篇小説「耽溺」を含めて、七つの短篇を収録している。その中でも、明治四一年四月、「太陽」に掲載された「日の出前」が、発表時期の最も早いものである。

ただし、これは泡鳴の（処女作）、つまり最初の小説作品ではない。「日の出前」が世に問われるまでに、「芸者小竹」（『新古文林』明三九・三）、「恋隠者」（『新古文林』明四〇・一）、「幼馴染」（『宇宙』明四〇・一一）が発表された。

臨川書店版『岩野泡鳴全集 第一巻』にある「日の出前」の解題には、「彼が小説に本格的に向かう最初の小説であったとも言える」とあり、「芸者小竹」などの作品と一線を画するものだとされている。単行本に〈耽溺〉と命名したのは、単に「耽溺」を収めているからだけではなく、編集にあたって〈耽溺〉という泡鳴思想を表現した作品を集める、といった志向によってなされたことであろう。泡鳴は、処女作「芸者小竹」以後の三作を切り捨て、四作目の「日の出前」を『耽溺』の中に入れた。その取捨選択からは、「日の出前」を自身の創作における

最初の大きな一歩だとする認識が読み取れる。

ここにまず「日の出前」の梗概を記しておく。

主人公吉本定蔵はかつてキリスト教の伝道者を志して神学を学んでおり、恋愛を神聖視していた。同教会の会員で、女学院の生徒の山下琴子に対して恋愛の感情を抱いていたが、琴子が定蔵自身のことを馬鹿にしていると悟って、その恋は壊滅に至る。それを機に、自らの生活全体が空想にすぎないことに気付き、現実的世間に触れようとする。定蔵は教会とのこれまでの関係を絶ち、製本工場で働き始めた。昼間は職工の監督をし、夜は工場の宿直をする。しかし、これまで身につけた学問は仕事の役に立たず、労働によって報酬を得たことのない自分のことを改めて「学問乞食」と痛感した。それだけでなく、職工のお貫が色目を使うことで、琴子の方が再び頭に浮かび、おのれの肉欲に悩まされる。初めて工場に床を取った夜は自分の過去や将来を考えて、ついに眠れず工場を出た。定蔵は「夢にまでも現れて来る肉の苦を避けよう」とすれば、一生、自分は覚めてゐなければならぬ」と考え、「はじめて実世間の洗礼を受けた」ように日の出を迎える。

この作品についての先行論としては、まず国民図書版『泡鳴全集』にある、大月隆伏（高陽）の解説^(二)を挙げなければならない。この解説は粗筋をまとめてから、次のように説明を加えている。

所謂氏の労働小説で、これを今日の平面的物質的な労働小説に較べて内部的深刻味のあることは注意すべき問題であらう。更にこの作は宗教研究家乃至新体詩人としての泡鳴氏が、決然自我を確立してまた自叙伝の一節として見ると又別個の興味もある。明治四十一年五月の作。これを後の『一日の労働』などいふ作と比較して味ふことは、泡鳴研究に大變興味あることと思ふ。

そして伴悦『岩野泡鳴論』（昭五二・一一、双文社）は基本的にこの大月隆伏の指摘を継承して本作を「労働物」として捉え、小説の内容を検討して、「かなり意欲的な作品であつた」と指摘している。また、「日の出前」論ではないが、村松剛「想像力と現実」（総合）昭三二・八）には見逃せない指摘がある。村松剛は国木田独歩の「日の出」（『教育界』明三六・一）と比較し、次のように述べている。

独歩の「日の出」に遅れること六年、明治四十一年に、こんどは岩野泡鳴が「日の出前」という作品を書いている。やはりある知識人が、懷疑と空論との生活を捨てて、生活人となる決意をするまでの物語だった。ただしここには、独歩にあるような明るい色はすでに見られない。むしろ題材にふさわしからぬ暗い絶望感が、ぜんたいに陰鬱な色彩をただよわせている。同様な題で、しかも同じ更生のテーマを扱いながら、日露戦争をはさんで、彼らがまったく明

暗をことにした作品をつくったということには、たんに二人の資質の相違という問題だけでは片付かない大きな時代の推移が感じ取られるのである。

この評論は近代文学を歴史的な流れで捉えようとするものであるから、「日の出前」は日露戦争前後の文学作品の差異を指摘するための素材の一つとして取り上げられたに過ぎない。この二つの作品を並べて比較した理由は何なのか、表題の類似のみによるのか、この短い言及では不明瞭である。とはいえ、独歩の「日の出」を併せて取り上げることは、小稿の第三章に一つの出发点を提示している。

小稿は「本格的に向かう最初の小説」と称される「日の出前」を取り上げ、泡鳴と密接な関係のある同時代の自然主義者の作品と具体的に比較する試みである。まず小説集『耽溺』と田山花袋との関係に検討を加えるところから始めて、次に独歩の「日の出」との関係を考察する。それによって、この「本格的」な作品に見られる泡鳴の手法を考えたい。

二、田山花袋「蒲団」との関係

『耽溺』の序に、泡鳴は次のように書いている。

花袋君よ、君に僕の最初の小説集『耽溺』を献じたい。／（中略）君は現代小説界の最初の具眼者であつたのだ。／君によって新傾向に就いたものは、故独歩氏もさうだらう。藤村氏もさうだらう。僕もその一人たるを否まないのである。

この「序に代ふ」で、泡鳴は田山花袋に対して賞賛の言葉を惜

しまない。そして、花袋の影響を受けて新傾向、つまり自然主義を表現する小説を書き始めたことに關しても、素直に認めている。明治四〇年九月、「新小説」に發表された「蒲団」の成功によって、当時多くの創作者が、小説の中にあたかも作者自身の体験らしきことを露骨に書くという方法を踏襲した。例えば、「蒲団」の後に出了た小栗風葉の『恋ざめ』（日本・明治四〇・一一・八）明治四一・一・四。単行本は明治四一・四、新潮社）はその好例の一つである。既婚の中年文学者の（第二の恋）を取り上げ、若い女学生に対する自己の赤裸々な欲情を暴くという書き方は、「蒲団」と軌を一にしている。当時、「早稲田文学」に掲載された「蒲団」を取り上げる「合評」（明治四〇・一〇）の中に、小栗風葉は次のような意見を寄せている。

『蒲団』を読んで、作家として最感心するのは、材料が事實であるか否とは兎に角、作者の心的閱歷または情生涯をいつはらず飾らず告白し發表し得られたと云ふ態度である。此真率な態度は、至極羨ましい。而して此事がやがて自然派作家が文芸上に成功すべき重要な条件なのであるまいか。

周知の通り、泡鳴の「耽溺」もこの方法の延長線上にあつて、既婚の中年文学者が（第二の恋）を敢えて実行した経緯を描く作品である。また、石井和夫『耽溺』の象徴表現——「いちじく」と「レオナドダベンチ」——（立教大学日本文学）平三・三）が「花袋の「蒲団」が、「耽溺」や「篠原先生」を書く泡鳴の念頭から去らなかつた痕跡が（中略）はつきりみとめられるのだから、「耽溺」が「蒲団」の延長線上で評価されるのも無理はないし、それは作者自身の本望だったろう」と指摘

したように、「耽溺」に収められた「篠原先生」（初出は「新文林」明治四二・二）一篇も、「蒲団」と密接な關係を持つとされている。それを受けてここで稿者が指摘したいのは、「蒲団」の影響を受けたのは「耽溺」と「篠原先生」だけではなく、「日の出前」にもその痕跡が見られるということである。

「日の出前」を分析するにあつて、まず筋書きを前半と後半に分けることができる。前半は主人公の吉本定蔵の身に変化が起きるまでの経緯を叙述したもので、後半は現実に触れようと一步を踏み出し、工場で働く定蔵の姿を描くものである。前半については、伴氏が「吉本定蔵の生きかたは、むろんそのままだではないにしろ、当時の泡鳴の実生活や、体験に負うところが大きかつたことは否定できない」と指摘したように、泡鳴自身のキリスト教体験と重なる部分が多いと考えられる。また、『神秘的半獣主義』（明治三九・六、左久良書房）では、明治二二年頃、自身に思想的な変化が起きて、「耶穌教の神が分からなくなつて、之を棄てゝしまつたし、また自分の愛して居た少女が理想のものでなかつた」であるとか、「精神は非常に錯乱していた」などと泡鳴は述べている。「琴子を神聖視することとは全く破れてしまつた」という、甘い気持ちが悪滅に至つた青年定蔵の心底に、作者泡鳴の実体験の影響があることに違いない。しかし、次のように、泡鳴が「蒲団」から影響を受けて手を加えた部分も存在していることにも注目しなければならぬ。

琴子の設定は、「蒲団」の女主人公「神戸女学院の生徒」の横山芳子と似ている。さらに、定蔵と琴子との關係の描写に、「蒲団」と類似した場面がある。長い引用になるが、まずは「蒲

団」の該当する箇所を引き、次に「日の出前」を引く。

ふと何ういふ聯想か、ハウプトマンの『寂しき人々』を思ひ出した。かうならぬ前に、この戯曲をかの女の日課として教へて遣らうかと思つたことがあつた。ヨハンネスフオケラートの心事と悲哀とを教へて遣り度かつた。此戯曲を渠が読んだのは今から三年以前、まだかの女の此世にあることをも夢にも知らなかつた頃であつたが、其頃から渠は淋しい人であつた。敢てヨハンネスに其身を比さうとは為なかつたが、アンナのやうな女がもしあつたなら、さういふ悲劇に陥るのは当然だとしみて、同情した。今は其のヨハンネスにさへなれぬ身だと思つて長嘆した。／＼流石に『寂しき人々』をかの女に教へなかつたが、ツルゲネーフの『ファースト』といふ短篇を教へたことがあつた。洋燈の光明らかなる四畳半の書齋、かの女の若々しい心は色彩ある恋物語に懂れ渡つて、表情ある眼は更に深い深い意味を以て輝きわたつた。ハイカラな庇髪、櫛、リボン、洋燈の光線が其半身を照して、一巻の書籍に顔を近く寄せると、言ふに言はれぬ香水のかをり、肉のかをり、女のかをり——書中の主人公が昔の恋人に「ファースト」を読んで聞かせる段を講釈する時には男の声も烈しく戦へた。

暫くはテニソンの『エノクアーデン』をやつてゐた。独りの女に二人の男、互ひにをさな馴染みが高じて恋となるが、フイリプの方が之を明しかねてゐる間に、エノクの方が成功してしまふ。フイリプは幾星霜を独身の生涯で通してゐるうちに、女の亭主が難船で不帰の客となつたと思つたか

ら、昔の情をうち明けて、自分がその一家の主人となり、むつまじく暮らすことになる。その有様を、不帰の客と思はれた者、乃ち、エノクが歸つて来て、ひそかにかい間見たが、事情を思ひやつて何にも知らさないで立ち去つてしまひ、死後漸くそれが女に分る。琴子は読み終つて——その時、はじめて全体の意が分つたのであらう——急に考へ込んで、うツとりしてゐるので、／＼婦人はすべてこんなに頼むに足りないものでしょうか？」と、定蔵は待ちかまへてゐた時が来たかの様に切り込む。気が弱いので、これ程のことにも不断は遠慮勝ちであつたのだ。／＼『そりやア、吉本さんが間違つてゐるわ、知らなかつたんですものを。』

琴子は女を弁護するつもりでさう云つたが、兎に角二重結婚の状態だから、多少きまりが悪かつたのだらう、赤い顔になつて首をかしげると同時に、左の臂を以つてからだを机にもたしかける。優しい姿、愛らしい顔、之に向つて坐つてゐる定蔵の胸は躍つて、前後左右の考へがなくなつたのも無理はない。

両作品の主人公、「蒲団」の竹中時雄と「日の出前」の吉本定蔵の背景には相違点があるが、女学生に英文の名著を教える設定は同じである。小栗風葉『恋ざめ』にも、ハイカラな女学生に、英語の勉強のために西洋の名著を教える設定がある。もちろん、明治期には、西洋教育を受け西洋文化に憧れをもつ女学生を描写する小説作品は少なくないし、教養のある男性が若い女性に学問を教授するという類型は、二葉亭四迷『浮雲』の文三とお勢まで遡ることができる。だが、ここに挙げた二つの作品では、その女学生に読ませる作品に、主人公の恋に対する

複雑な気持ちが託されているという手法が目立つ。さらに、主人公が西洋の小説を読ませながら、若い女性の姿を目の当りにして、自分の感情の高ぶりを抑えかねている描写も共通している。このような近似した設定が見られることだけでなく、「日の出前」が世に出る前年に「蒲団」が文壇に大きな刺激を与えたことも考え併せるなら、「蒲団」から受けた影響が大きいと見るのは妥当だろう。

名高い「蒲団」から、泡鳴は単に設定をそのまま借用したのだろうか。そうではない。自分の感情を辛うじて抑えた時雄に対し、中年文学者のような社会地位を持たない定蔵はこの好機を逃さず、「軽く琴子のやわらかい手の上に触れ」た。しかし、琴子はただ『「意気地のない男」と腹の中であざけ』つて、定蔵の手探りを拒絶した。琴子は二人の体型が合わないという理由で「生理上から愛情を保ちあふことが出来ない」と述べ、また「学問乞食」であつた定蔵に対して「早く生活の道をお立てなさらないければ」と現実的な問題を指摘した。これを機に、定蔵はこれまで神聖視してきた女学生は、「普通の女だ」、「女の賢い俗物だ」とやっと悟り、自身の甘さを痛感した。この挫折をきっかけに、本当の現実を目を向けるようになった。この箇所では、定蔵は「蒲団」の時雄より勇敢にもう一步を踏み出したが、結局それは「空想」の壊滅をもたらしている。このように、二つのテキストを並べると、時雄のような中年文学者の恋心は、ただの「空想」にすぎないと、泡鳴は風刺しているのではないかとも見られる。深読みになるかも知れないが、「蒲団」の設定を揶揄していると捉えることも可能である。

時期は少し後になるが、泡鳴は「僕の創作的態度を明かにす」

（『毎日電報』明四四・一・一五）で『放浪』の作者は「蒲団」の作者よりセンチメンタリストだという批判に対して、「蒲団」における花袋の態度こそ批判されるべきと主張している。その理由として、花袋の作り上げた主人公の時雄は、「もう少しツ込んで女に向ふべきをさうしないで、自己の心でばかりやきもきし、女の行つた跡で其蒲団のほひをただ鼻ひで見た」ということを挙げている。泡鳴のこのような見解は、「日の出前」の設定に反映しているように思われる。

「蒲団」と同じく〈第二の恋〉を扱った「耽溺」では、その耽溺行為の対象は女学生ではなく、「見ず転」芸者にまで落とされている。この点も泡鳴のパロディ志向と読み取れる。

詩や評論ですでに文壇での地位を獲得した泡鳴が、どのようにして自分の小説方法を確立していったのか、それは泡鳴研究の重要な課題であることは言を俟たない。これを解くためには、「日の出前」は大きな手がかりの一つとなるに違いない。「日の出前」はこのように同時代の作家から影響を受けており、更にそれを超えようとする試みが見られるのである。しかも、それは花袋に限ったことではなく、国木田独歩もこの作品と関係していると考ええる。

三、国木田独歩「日の出」との関係

独歩の「日の出」と「日の出前」との比較に入る前に、まず独歩と泡鳴との実生活上の関係を検討しておきたい。先行論ではあまり論じられていないが、泡鳴が独歩の「日の出」を参考にした可能性が高いということを、二人の深い交流から指摘し

てみる。

独歩が亡くなったのは、「日の出前」が発表されたのと同年、明治四一年六月二三日である。翌七月、すぐに泡鳴執筆の追悼文「国木田独歩君」（「新声」明四一・七）と「故国木田独歩氏に就て」（「東京二六新聞」明四一・七・四〇八）が発表された。その記述によれば、泡鳴が独歩と知り合ったのは明治二二、三年頃まで遡ることができるが、親交が深まったのは、明治三五年一二月、独歩が矢野龍溪の招きで敬業社（のちの近事画報社）に入り、「近事画報」の編集になってからである。二人は雑誌の関係もあり、また、自然主義運動の隆盛に伴い、「龍土会」にも名を連ねていた。

独歩の近事画報社時代の仕事は「近事画報」の編集だけではなく、「新古文林」という雑誌の編集も担当している。「発刊の辞」に「新と古と問はず、佳き文章を併せ掲げ」とあるこの雑誌は、明治三八年五月に創刊され、途中から発行元が独歩社に変わり、四〇年四月に独歩社の破産に伴い終刊を迎えた。独歩の作品はもちろん、田山花袋、小栗風葉、徳田秋声などの作品も「新古文林」誌上に掲載された。ここで特に注目したいのは、泡鳴の小説処女作「芸者小竹」と、それに続く「恋隠者」がこの雑誌に寄稿されたことである。この事実を鑑みるに、泡鳴が小説を書き始めたのには、独歩と何らかの関係があるかもしれない。少なくとも、泡鳴の小説は編集者の独歩から一定の評価を得たからこそ、この雑誌に発表できたのだろう。逆に言うとうと、泡鳴が小説を書く際、編集者の独歩の小説を意識しなかったとは考えにくい。第四作の「日の出前」は「太陽」に発表されたものであるが、両者の表題が類似しているという事実か

ら、独歩の「日の出」の影響はやはり無視できないだろう。

また、この時期の独歩の小説に関して、触れておかなければならない事実がある。それは「日の出」を収録した単行本『運命』（明三九・三、左久良書房）の出版によって、独歩の小説が文壇で自然主義文学として再評価されたことである。例えば「中央公論」に掲載された「新刊批評数件」（明三九・四）では「此人此書を以て確かに現今小説界の最も注目を払ふべきものとして読書界に推奨するものである」と評されたように、同じ月に世に送り出された島崎藤村の『破戒』と共に、『運命』は新傾向を代表する文学として当時の文壇を賑わした。

泡鳴も文壇の動向に敏感に反応して、出版直後にこの二つの作品を入手して読んだ。明治三九年三月三〇日付の「旅中日記③」に詳しい記述がある。

近頃、僕の手に落ちて来たものに、独歩君の『運命』とこの『破戒』がある。前者は出発前に読んだので、後者を車中で読まうと思つて持つて来たのだ。

そして、『破戒』を抑えて『運命』を高く評価する記述が同じ文章にある。

要するに、この著（稿者注…『破戒』）には、大きいとか、深いとか云ふ方面は望まれないのである。独歩君の『運命』には、外国の運命悲劇にあり振れた形式や、何でもない様な筋などがある代りに、『酒中日記』の様な、何となく僕等の心に深く食ひ入る作がある。

また、『運命』に関する泡鳴の言及はこれだけではない。「万朝報」に掲載された素堂「文壇の歩調」（明四〇・九・二二）の「自然主義の没落を見んとす」という非難に対して、泡鳴は「自

然主義雜言」（読売新聞）明四〇・九・一五）で、自身の当時の自然主義史観を次のようにまとめている。

事実上、自然主義は没落どころか、まだその初歩の地盤が確まらない位なのであるのだ。わが国の自然主義派（たゞの自然派にあらず）は、田山花袋氏の『露骨なる描写』にその最初の刺撃を受け、国木田独歩氏の旧作出版と島崎藤村氏の『破戒』とに初歩の発見をなし、風葉氏の新作や、花袋風の小説をもつと目に立つ様にした佐藤紅緑、正宗白鳥諸氏の作に、之の揺曳が見えて来たのだ。

この「旧作出版」とは『運命』などの作品を指しているが、泡鳴は自然主義運動における独歩の存在の大きさを認めている。泡鳴はこの新傾向の旗を振る一人として、詩や評論だけに甘んじることなく小説の創作をも試みていた。その際、独歩の作品、特にこの時期に再評価された小説集『運命』を参考にするとすることは、十分に考えられることであり、「日の出」はまさに『運命』に収録されているのである。

では、小説のテキストに移る。「日の出前」において、定蔵は「この世の新鮮な空気」を感じるために、労働を選んだ。この点が大月隆丈や伴氏がこの作品を「労働物」と呼ぶ主因の一つである。作品の内部構造を見ても、これまで生活面で庇護を受けていた教会との関係を絶った定蔵には、自活するための仕事が必要である。だが、教会で神学や哲学などの「空学問」を学んできた定蔵には、実業に関する知識はむしろない。そこで定蔵は「学問乞食」である知識人から、労働者と肩を並べるレベルまで一気に落とされた。ただ、このような苦境に立ったのは、他でもない、定蔵自身の選択によるものである。

労働によって自活するという考え方は、独歩の「日の出」の中心思想でもあった。この短い小説は、新聞記者児玉進吾が友人に連れられ、ある倶楽部の集まりに参加したが、席上で出身を聞かれて、自分の学歴が小学校であることを告白し、母校大島小学校の創立などを誇りを持つて語る話である。小学校の創立者は池上権蔵という豪農であるが、放蕩の末すべての家産を失い、ある日、自殺を図ろうと海辺に出た。そこで遭遇した大島仁蔵という老人の話に悟られ、再び奮い立って生きていく。老人は次のように説いている。

日は毎日、出る、人は毎日働け。さうすれば毎晩安らかに眠られる、さうすれば、其翌日は又新しい日の出を拝むことが出来る。／一日働いて一日送れば、それが人の一生涯である、日の出る時に人は生れて、眠る時に人は死ぬるのである。

伊藤久男『国木田独歩——その求道の軌跡——』（平一三・六、近代文芸社）はこの作品に対して、「積極的価値観に基づく人間像を創作し、「愛と誠と労働の真理」を迷うことなく描き上げている」と評価している。「愛と誠と労働の真理」とは、独歩が『欺かざるの記』（前編明四〇・一〇、後編明四一・一、左久良書房）で提示した言葉であり、その思想はこの老人の口を通して語られた。『莊子』まで遡ることができる、「日出でて作し、日入りて息う」という思想をもとにして、独歩はこの作品で労働が個人の価値を向上させ、自己を確立するという価値観を主張している。だが、独歩は「日の出」で労働を「為す有る人となれ」という上昇志向と捉えるのに対して、泡鳴の「日の出前」では、労働は現実には回帰する手段として提示されてい

る。《労働》という要素は、どちらの小説においても重要な役割を演じるものではあるが、相違も見られる。また、《労働》に關してだけではなく、《教育》に關する部分についても同じような關係を指摘することができる。

「日の出前」には、定蔵が初日の工場監督の仕事を終えて寢床につくまでに、小さなエピソードが一つ挟まれている。それは工場の主人宅に呼ばれ、風呂をもらいに行く場面である。主人の細君は湯上りの定蔵に茶を勧め、「うちにも男の子や女の子がをりますので、また暇には教へて貰ひます」と、彼に子供に學問を教へてほしいという旨を告げた。しかし、雇つてくれた恩義があるにもかかわらず、定蔵はこれを激しく拒絶した。

『私などア』と、思ひ切つて、『とても駄目です、人を教へるところではない、自分を教へて行かなければならないのですから、それに今度考へることがあつて、今日までやつて来た勉強を全く放棄してしまふ覚悟です。』

學問を捨てて工場での労働を始めた定蔵にとって、細君の要求は「意氣地なしとあはれまれる」行為で、不愉快になつたのはもつともであるが、その「人を教へるところではない」という猛烈な反発には、違和感を覚えなくもない。このやや突飛なエピソードを差し挟む必要性はどこにあるのだろうか。

「日の出」では、《教育》は池上権蔵が老人の教訓を忘れることができず、「拝まれるほどの美しい事」として遂行した事業である。「日の出を見ろ」という校訓を掲げた大島小学校は、教育によつて人々を導き、新しい希望の種を撒く。その精神を教つた児玉進吾は、誇りを持つて「僕が校長の下に大島小学校に居たのは二年半で、月日にすれば言ふに足らず、十二歳

より十五歳まで、人の年齢にすれば腕白盛でありましたけれど、僕が眞の教育を受けたのは此時、僕の一生の羅針盤を置れたのは実に此時です」と語り、教育の重要性を力説している。これは独歩自身の見解でもある。『定本国木田独歩全集 第三卷』の「解題」に「発表誌が教育雑誌の新年号であることを作者は意識して書いてゐるが、独歩は若い日、山口県田布施で波野英學塾を経営したり大分県佐伯の鶴谷學館で教師をしたりして、青少年の教育には関心を抱いてゐたので、單に発表誌への妥協といった気持ち以上に、彼の教育思想をこめて書いてゐると思はれる^(四)」とあり、教育に対する独歩の思い入れの強さを指摘している。

それに対して、「日の出前」では、《教育》は陳腐なイメージをともなつて登場する。既存の教育体制は、小説の冒頭で早々に否定されている。定蔵は、自己の覚醒は外來の知識によつては成し得ず、あくまでも「自分で自分の中の友を発見するより外はない」と気づき、「自分を教へて行かなければならない」と、教育の価値を根本的に否定している。定蔵のこのような意志は、細君の要求に対する拒絶を通して強く表現されていると思われる。

ここまで検討してきたように、泡鳴「日の出前」と独歩「日の出」とは同じ《労働》と《教育》という要素を備えた小説である。むしろ、《労働》にせよ、《教育》にせよ、どちらも小説の中で特殊な主題や要素ではない。しかも、ここまで見てきたように、《労働》には位相の相違があり、また《教育》を取り上げていても独歩と泡鳴の立場は大きく異なっており、泡鳴が独歩の作品を踏まえたといふことはできない。しかし、本

章の前半で論じたように、泡鳴と独歩には深いつながりがあることから、表題の類似するこの二つの小説の関係をやはり見逃すことができない。

泡鳴は自作に「日の出」に見られる要素を取り入れたが、主張したいところは別にある。常に仲間と競合意識を持っている泡鳴であるから、受容したというより、むしろ変容させたと捉えるべきであろう。前章で論じたように、花袋「蒲団」の一部を踏襲しつつも、含意を大きく変化させるという特徴が見られることもあり、独歩「日の出」との関係においても、泡鳴が同じ趣向の手法を採ったと見るのは、不思議なことではないだろう。

泡鳴は独歩の思想や文学に共感を持ちつつも、完全に同調しているわけではない。泡鳴は「文界私議」（『読売新聞』明四〇・一一・一三）で次のように独歩の問題点を指摘している。

氏の行き方が自然主義に向いて居るのは事実だ。たゞ同主義の全体を具現して居ないのは、花袋、藤村の諸氏と同様である。

そこで泡鳴は自身の小説の中に、定蔵の体験を通して、「主義の全体を具現」する内容を盛り込もうとした。花袋や独歩の存在を認め、その文学を受容しつつも、変容することによって、おのれ自身の独創の思想を表現しようとしている。その手法が、この「日の出前」に見られるのである。

四、「思想の情化」としての小説

「新古文林」に発表された「芸者小竹」や「恋隠者」は、大

月隆仗が「いかにも硯友社同人の当時の作の響況を受けてある作風」⁽⁵⁾であると指摘したように、古い傾向を帯び、殆ど注目を浴びなかった。「日の出前」が世に出てから、ようやく泡鳴小説の同時代評が少しずつ出はじめた。「岩野泡鳴氏の「日の出前」はデカダンの人物を描いたもので、氏の初めての小説、論文の読みづらいに反し、これは筆がなだらかだ。案外ひどいものではない」⁽⁶⁾という好評もあるが、文壇の高い期待に応えられず、全体的に評価はよくなかった。確かにこの作品には生硬さがある。『神秘的半獣主義』以来、高く掲げた「悲痛の霊」や「霊肉合致」などの思想が定蔵の体験を介していくつか提示されている。しかし、定蔵の体験、つまり小説のプロットは、その思想を支えることができず、単に定蔵の口を借りて作者自身の主張を打ち出すものになっているという欠陥がある。この点は同時代評でも指摘された。このような批判に対して、大久保典夫氏は「泡鳴の小説の特色である、一事象に対する主人公の「哲想」がすでに現れている」⁽⁷⁾と指摘している。泡鳴は「蒲団」登場の直前に、思想を表現できる文芸について考えていた。

今や思想の情化が表象詩に最も必要な条件となつて来た。僕の悲劇『焰の舌』（新小説掲載）並に『斧の福松』（文芸倶楽部）は、随分之を適用して見たのだ。

これは明治四〇年四月から六月にかけて「早稲田文学」に連載した「日本古代思想より近代の表象主義を論ず」という論文からの引用である。この頃の泡鳴は、新自然主義を鼓吹する評論を発表すると同時に、口語自由詩の問題を考えていた。そして、口語自由詩に対する思索を端緒に、詩形の束縛から脱して、「思

想の情化」を自由になしうる散文へ目を移し、小説の可能性を考え始めたわけである。その状況で「蒲団」に遭遇し、「作者の心的関歴または情生涯をいつはらず飾らず告白し発表し得られた」と風葉が語ったのと同じように、絶大なヒントを得たのだらう。それを試みて初めてあげた成果が、正しく『耽溺』という小説集である。

ここで注目すべきことは、泡鳴は小説創作においての新参者であるとはいえ、安易に自分の体験をそのまま作品にしたわけではないことである。この時期に花袋「蒲団」や島崎藤村「並木」が引きおこした「モデル」問題に対して、泡鳴は「文界私議」（『読売新聞』明四〇・一一・三二）で次のように述べている。

創作にモデルがあるからと云つても、その本人と全く同一なものになると思ふのは、無経験者の見解でなければ、一部の人々の思ひ違ひである。芸術は結晶物であるから、その全体として無用な点は削り、必要な性格を角立るのは必ずしも許されないことではない。

この時期の泡鳴は、芸術作品を介して思想を披瀝することを重要視していたから、それを果たすための虚構に対しては、肯定的な立場を取つて、その必要性を説いている。「作者の心的関歴」と「思想の情化」は、根本的に共通している。

「蒲団」が成功を収めたことは、泡鳴に新しい小説創作への刺激を与えた。また、泡鳴の小説へ向かう過程に、独歩の存在が看過できないことは、第三章で論じた。「思想の情化」というキーワードについて、独歩が自身の作品と実際の出来事との事実関係について述べた「予が作品と事実」（『文章世界』明四〇・九）を挙げなければならない。これは「蒲団」と同月に発

表されたものである。その中で、独歩は「空知川の岸辺」（『青年界』明三五・一一）という作品に対して、「主人公の感想は余の感想なり」とあり、「あの時分」（『早稲田文学』明三九・六）に対して、「事実が八分ならば多少の附加が二分。しかし心持は少しも変へて書てない」と書いている。「蒲団」の方法が成功を収めたことだけではなく、作者自身の「感想」や「心持」を小説の中に書くという独歩の発言も、泡鳴に大きな力を与えたのだらう。前述したように、「日の出前」には「必要な性格を角立る」こと、すなわち主人公定蔵の描写に作者の手が加えられている。このように、虚構を加えることによって、泡鳴は花袋と独歩の作品の影響を受けつつも、自らの思想を打ち出すことに成功していると考えられる。泡鳴が花袋や独歩の作品から栄養を摂取することを憚らなかつた裏に、新自然主義に対する泡鳴の強い意志と自信があつたのではないかと考えられる。

明治四一年一月一日に発行された「趣味」の「文芸界消息」に、次のような情報がある。

来年の小説壇は新なる試作多く現るべし、戸川秋骨岩野泡鳴其他数氏の新作出づるべしと云ふ。

明治三九年の『破戒』や『運命』、そして明治四〇年の「蒲団」はいずれも大きな反響を起こした。次に誰の作品が新傾向を代表する文学として出現するのだろうか。このような期待に応えた「新なる試作」として、泡鳴が世に送つた最初の作品が「日の出前」である。しかも、泡鳴自身も、「文界私議」（『読売新聞』明四一・三・一五）で、次のように「日の出前」の宣伝をしている。

いつかも云つた通り、写実主義は自然の外形を見てゐたのだが、僕等は自然を内観してゐるのだ。この傾向は単に思索上ばかりでなく、作物の上にもさうだ。近い話が、僕が来月の太陽で発表する小説『日の出前』を見てもわからう。

泡鳴は、自身の新作を「自然を内観」することを実現したものだと考えている。これは、既に評論などで唱えていた思想を作品化できた、という泡鳴の意気込みと見てもいいだろう。

ところで「日の出前」という表題には、独歩の「日の出」との関係以外に、多様な意味が含まれていると見ることができると。たとえば、泡鳴の父親直夫が経営した下宿は「日の出館」⁽¹⁾という名前であつた。これは、偶然であらうか。「芸者小竹」の結末の場面で、宮田と小竹が日の出を眺めて漏らした「活き返るやうじやア御座いませんか」という言葉からも、泡鳴が「日の出」というイメージに強く惹きつけられていたことが看取される。さらに、同じ表題の外国文学作品が存在しており、それとの関連が見られる可能性がある。

それはドイツ作家ゲルハルト・ハウプトマンの戯曲『日の出前』である。ハウプトマンの出世作とも言える作品で、早い段階で日本の文壇に紹介された。登張竹風『ニイチエと二詩人』(明三五・一、人文社)に「ハウプトマンは『日の出前』を著はして、自然派文学破天荒の作と唱へられ、一躍文壇の驍将となれり」とあり、その梗概と影響を詳細に紹介している。また、森鴎外『ゲルハルト・ハウプトマン』(明三九・一〇、春陽堂)でも、『日の出前』の興行を紹介し、作品の分析もしている。

ただし、泡鳴の「日の出前」とハウプトマンの作と比較してみると、直截な繋がりは見られない。過去を放棄し、現実社会

へ第一歩を踏み出した吉本定蔵に対し、戯曲『日の出前』の主人公オトは過激的な社会主義党の信者であり、労働者のために活動している。また、女主人公ヘレエネを中心に展開されており、遺伝問題がモチーフになっている。また、テキストも『日の出前』の方が圧倒的に長く、登場人物の設定も異なり、二つの作品には隔たりがある。

ただ、当時の日本のハウプトマン受容の第一人者は、田山花袋であつた。花袋は「蒲団」で、ハウプトマンの『寂しき人々』を取り込んで、時雄の心境を重層化する手法を使っている。泡鳴が、花袋に対する競合意識から表題にハウプトマンの作品名を取り、敢えて「日の出前」という題にしたと読めるのではないか。『日の出前』という題目を利用することによって、花袋に対して挑戦しようという意識が泡鳴の念頭にあつたとも考えられる。『日の出前』という表題にはこのような読み方の可能性も潜んでいる。

「日の出前」に続く「老婆」(趣味)明四一・五)や「戦話」(新小説)明四一・六)が他者の体験談を借りて自身の思想を表現する仕組みになっているのを見て、この時期の泡鳴には、充分な造形力がまだ備わっていなかったようである。「耽溺」の成功以前、泡鳴は「日の出前」において、意欲的に「思想の情化」を実現しようとするが、まだ糸口を掴んだにすぎない。小説の末尾で定蔵は「実世間の洗礼を受けた」と自覚するが、工場へ向かう途中で学校に行く琴子に遭遇し、やはり諦めきれずに、「かの女の活気ある姿が羨ましくつて堪らなくなつた」とある。この未練を残した終末は恐らく作家泡鳴もいまだ模索中の状況にいたということだろう。「耽溺」によつて小説

における成功を収めるまでには、まだ距離がある。

五、結び

岩野泡鳴はどのような手法で小説を作り上げるのか。それを考えるためには、〈処女作〉をはじめとする初期の作品を組上に載せることも有効な方法であろう。拙いかもしれないが、そこに作者の様々な試行錯誤が見られるという可能性がある。「日の出前」には、常に文壇では特殊な存在とされている泡鳴が、思想的に合致する点のある仲間の小説に見られる素材を取り出し、それを自作に練りこむという方法が窺える。

しかし、それは単なる模倣ではなく、それを超える独創を用意しようとしている。実はこの方法は、評論においても泡鳴の常套手段なのである。例えば第二章に引用した『耽溺』の序文で、賛辞を惜しまず花袋を褒めつつも、一頁以上を割いて「芸術と実行」問題をめぐった反対意見を並べている。自分自身が唱えるものこそ、本当の新文学、本当の新自然主義であるというように、泡鳴は一步も譲らず、いつも強気で文壇に臨んでいた。

「日の出前」を一つの出発点として、泡鳴が自分の思想や論理を持って、同時代の文学者から栄養を摂取しつつ、次の作品へ邁進していく姿には、文学者としての真摯な姿勢が感じられる。さらに、今後、このような視点でもって泡鳴の作品を読み解く必要がある。それを通して、泡鳴と同時代作家との密接な関係も明らかになるのではないかと考える。

〔注〕

テキストの引用に関して、特記のない限り、初出に拠った。漢字は通行の字体を用い、ルビを適宜略し、改行は「／」で示した。

(一) 「解説」『泡鳴全集 第一巻』大10・1。引用は『岩野泡鳴全集 別巻』(平九・四、臨川書店)による。

(二) 『岩野泡鳴論』(昭五二・一一、双文社)

(三) 初出未詳。引用は『岩野泡鳴全集 第十六巻』(平九・七、臨川書店)による。

(四) 福田清人による。(昭五三・三、学習研究社)

(五) 注(一) 参照。

(六) XYZ (正宗白鳥) 「書物と雑誌」(『読売新聞』明四一・四・

五)

(七) 『岩野泡鳴の研究』(平一四・一〇、笠間書院)

(八) 注(七) 参照。

〔付記〕

本稿は平成二二年度京都大学国文学会(平成二二年一月四日、於京都大学)における口頭発表に基づいて執筆したものです。席上、御教示賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

(おう おくうん・本学文学部非常勤講師)